

### 【第3版について】

第3版での新たな追加、変更、大幅改訂点について述べる。

第1は、第11章「高度経済成長の教訓：GDPを超えて」を追加した点である。日本の戦後高度経済成長を分析し、マクロ経済学的視点から、将来への方向性を示すことを試みた。高度経済成長の光と影の分析を通じて、経済成長が生活の豊かさを示すとは限らないことを明らかにする。経済成長がGDP（以前はGNP）成長によって測定されることを踏まえ、その原因がGDP概念の特質の中に見出されることを示す。GDPの限界を克服するために、その後開発された経済純福祉の指標の意義と限界を明らかにする。さらには、より包括的分析を模索する社会指標、幸福の経済学への展開をたどり、将来の方向性のひとつを示す。これは現時点における著者の主張である。

第2は、第4章「貨幣分析」についてである。近年の日本の金融政策は正常と言いがたい。バブル崩壊とその後の不良債権の処理をめぐって、さらにはリーマン・ショック後の金融危機を受けて、これまで金融の常識を超えた政策が行われてきた。緊急避難的措置にとらわれて、貨幣理論が示す基本的分析の意義を忘れることはできないので、なるべく基本政策を明らかにし、個別特殊事情については注で言及することに努めた。次に第9章「所得分配」についてである。この問題もバブル後の経済格差拡大（所得分配の不平等化は1980年代初頭から始まっている）という背景の中で、政治および経済の世界で注目的となったトピックスのひとつである。この問題に関する実証的分析を踏まえ、大幅に書き直した。日本で格差ははたして拡大したのかどうか、所得分配を国際的にみるとどのあたりに位置するのか、といった問題を扱った。

第3に、図表および本文中のデータについては可能なかぎり近年まで延長し、差し替えた。第9章では大幅改訂に伴う図表の差し替え・追加を行い、第11章でも相当数の図表が含まれる。

第9章の後半改訂部分と第11章は拙書、*Postwar Japanese Economy: Lessons of Economic Growth and the Bubble Economy* (Springer, 2010) の一部要点を基に記述している。なお、初版における第7章付論は拙書、*Profits, Wages and Productivity in the Business Cycle: A Kaldorian Analysis* (Kluwer Academic Publishers, 1997) の第5章を基にしてまとめたものである。したがって、本書はマクロ経済学の入門書であるが、部分的には中級ないしは上級の教材としても使用に耐えうるであろう。反面、次第に参考文献の数が多くなっていることも否めない。これらの部分についても、簡潔かつわかりやすく書くことに努めたが、読者のご批判に委ねたい。法律文化社、とくに田麿純子代表取締役社長には、本書初版以降、このたびの改訂出版にあたっては一方ならぬお世話になった。心より謝意を表す次第である。